2回 TAE を施行したところ著明な抗腫瘍効果が得られ，現在4カ月生存中．症例3は72歳，男性．抗癌剤動注（CDDP，MMC，ADR）により腫瘍が縮小し延命が得られ，11カ月生存した．血流が比較的豊富なためか TAE が有効であり，また動注有効例もみられるので，積極的治療で予後の改善が得られるものと思われた．

41）転移性肝癌におけるリザーバーによる反復肝動注施行例の予後に関する検討
—大腸癌肝転移例を中心に—

畑　耕治郎・五十嵐広隆
五十嵐健太郎
月岡　　恵・何　　汝朝（新潟市民病院消化器科）
市井吉三郎
山本　睦生・斉藤　英樹（同 第一外科）

大腸癌肝転移患者48例にリザーバーによる反復肝動注を施行し予後を検討した．肝転移巣に対する直接効果は奏効率 33.3％で，50％生存期間は 504 日であった．多変量解析では転移巣の肝占拠率が有意な予後決定因子となり，300<ALP，500<LDH 群では予後不良であった．治療継続期間は平均 17.7 月で，全経過中痛院治療が占める期間は平均75％であった．治療継続中の肝外病変の出現が 52.4％，悪化が 83.3％にみられた．本療法は痛院で長期治療継続が可能なため大腸癌肝転移に対して有用な治療であると考えられるが，肝外病変のコントロールを考慮した治療が今後の課題である．

42）DIC を合併し PTGB-D で救命しえた気腫性胆嚢炎の1例

菅原　　聡・波田野　徹
銅冶　康之・佐藤　貞之
佐藤　祐一・窪田　　久
富所　　隆・戸枝　一明（厚生連長岡中央綜合病院内科）
杉山　一教

急性気腫性胆嚢炎は本邦では 1958 年に初めて報告され，胆嚢内腔及び胆嚢壁内にガス貯留を認める比較的稀な疾患である．これまでは早期手術が提唱されてきたが，近年経皮経肝胆嚢ドレナージ（PTGB-D）施行例が報告され，その有用性が認められている．今回我々は高齢で DIC・心房細動を合併し，早期に PTGB-D を施行して良好な経過をとった気腫性胆嚢炎の1例を経験したので報告した．敗血症や DIC 等の重篤な合併症を有し，重症化している場合が多く，緊急手術は危険性が高く，比較的侵襲の少ない PTGB-D は胆嚢内の減圧，排液，抗生剤局所注入を可能にすることからも良い適応であると考えられる．

43）術前には切除不能かと思われた肝門部胆管癌の1切除例

佐藤　　攻・清水　武昭
宗岡　克樹（信楽園病院外科）
柳沢　善計・村山　久夫
山際　　訓・曽我津也子（同　　内科）

症例は72歳，男性．閉塞性黄疸で発症した肝門部胆管癌症例であり，PTCD を左右1本ずつ施行した．その後，後区域枝にも PTCD を施行したが，ドレナージされない左内側区域枝，尾状葉枝の胆汁鬱滞から胆管炎が頻回に発生．病変は左は内側区域枝分岐部におよび，右は前後分岐部を越えていると術前診断し，根治切除は困難かと思われた．しかし，胆管炎を頻回に起こすことから救命のため切除にふみきった．切除は拡大肝左葉切除術を施行．肝門部の胆管分岐形式は北回り2分岐型ではなく，南回り後枝総肝管流入型であり，根治切除が可能であった．肝門部の胆管分岐型を正確に診断することの重要性を痛感した症例を経験したので報告した．

44）当院における胆道系 Expandable Metalic Stent（EMS）使用例の検討

銅冶　康之・波田野　徹
菅原　　聡・佐藤　祐一
窪田　　久・岸　　裕
富所　　隆・戸枝　一明（厚生連長岡中央綜合病院内科）
杉山　一教

近年 EMS の開発が進み，胆道閉塞に対し胆道系 EMS が一般臨床で広く使用されはじめている．今回我々は平成5年1月から平成6年2月までに，7例の胆道閉塞症例に8回 EMS を挿入したので報告する．EMS は全て Cook 社製 GIANTRUCO-RÖSH Biliary Z-Stent を使用した．

7症例の平均年齢は73才，EMS 挿入后の経過は13ケ月から2ケ月で平均7.7ケ月，全例生存中である．再閉塞症例を2例認め，1例に EMS の再挿入を行った．7症例全てが PTC-D tube を抜去出来，減黄効果も充分で，家庭復帰が可能であった．